

なにがデザイン(では)ない(のか)(序)

—how we can describe: to design and design not

関 口 久 雄

序

ペダンティックは忌み嫌われている。知ったかぶり、賢立て、銜学趣味等、もともとその名詞 *pedant* が使われはじめた当初から、そして、特に日本には、謙虚、思慮深い、能ある鷹は爪を隠すといった美德／因習があるからか、それは、今では大学という閉じられたコミュニティに巣くう輩たちを冷たく揶揄する物言いの一つであることは否定できない。今日の社会は、いつの頃からか、カンタン／わかりやすい、が第一義となった、(それに応じるかのように)大学という学を問う場も変わった(のであろうか)、(当然のごとく)一方の主役である学生たちが変わった(だけではない)、もう一方の主役たちも変わった(はずである)。

すべてのものごとには、はじまりがある。本には最初の一文がある、その一文は無数の可能性の中から選択されている、そこに規制はない。《Je hais les voyages et les explorateurs》から旅の記録を綴りはじめても、《砂山を細く開いた、両方の裾が向いあって、あたかも二頭の恐しき獣の踞ったような、もうちっとで荒海へ出ようとする、路の傍に、崖に添うて、一軒漁師の小家がある。》のように風景を描写しても、《この物語はきみが読んできた全部の物語の続篇だ。》となにもかもを引き受けてしまってもかまわない。その一文から、その本は、はじまる。その選択によって、その本は、規定される。

《引用／編集》は魅惑的である、《カットアップ》《リミックス》等と特別なものとみなす必要もない、素材に眺めるだけでそこにも無限の可能性の中からの選択／葛藤を見出せる。《The book of the generation of Jesus Christ, the son of David, the son of Abraham.》のofからfを、Jesusからuを、Christからcを、bookからkを取り出して、fckと並べることが可能である。改めて述べるまでもなく、《引用／編集》をくり返す論理の展開も選択の結果である。あらゆるものに目配せしなればならない帰納／適切でない前提を選択しうる演繹、いずれにしても論理は矛盾も破綻もする／できる。因果が証明されるとは限らない、現実社会では正しい論理展開が正解でもない。

音が聞こえる、音を聴く、音に論理を加えると音楽になる。リズム・旋律・和声から構成される西洋音楽に代表される厳密な規則によって成り立つ世界。けれども、《A4||イ||440》という振動数の基準が実は地域

や状況によっては異なるのも現実。《録音》というテクノロジーの登場によって、音は音として記録できるようになった、より遠くへ、より未来へ、音(楽)を継承、流通可能になった。結果、自らの音を追い求めるためにスタジオのみを演奏場所を選択する者や音楽を安易に消費する者があらわれ、ゆえに、実演が貴重／贅沢なものとなった。《D.J.》Ⅱ《引用／編集》の出現によって、音楽活動における楽器の演奏技能が必須でなくなった。もともとなにもかもが音源となると気がついていた者たちもいた、《沈黙》さえも。《偶然》も大事な要素である。《4分33秒》の間、音がなくてもかまわない、音でなくてもかまわない、273秒である必要もない。言わずもがな、すべての表現分野と同様に、規格外の個性の顕現によって、世界は大きく広がる、これまでの約束事が全否定されてしまうことさえある。ただし、序列や賛辞を欲する者に、神は微笑まない。神に愛された者に、いわゆる常識や道徳を求めても意味はない。言うも更なり、新しいなにかは常に待望されるが、なんの疑いもなく古いヘッドフォンを具えたままならば、たとえ新しい音(楽)に巡り会ったとしても、それに気がつくことは(でき)ない。

今日において、より多くの情報を伝えようとメディアを検討すると、おそらく映像が選択されるであろう。映像は、撮影できるようになった、編集できるようになった、公開できるようになった、だれにでも容易に。世の中は映像で満ち満ちている。映像についての、いわゆる技術は普及した、一方、いわゆる知識はどうなのであるうか。たとえば、いわゆる普通の映画ファンに、ある映像作品を見せる。その人は、この監督はナレーシヨン／字幕という技法を知らないのか、音楽もついてない、編集もまともでできていない、と呆れてしまう(か

もしれない)。その監督は述べる。《ナレーションは嫌いです。観客に何を考えるのかを押し付けるから。私の映画では、観客を、ここで起こっていることの真ん中に置いて、観客には自分の目で見たもの感じたものを考えてもらう。《∴》ナレーションを付けることで語れることがあるとしたら、それは観客が映画監督と同じ位賢いか、さもなければ同じ位バカかということくらいでしょう。》。別の監督の作品も見せる。対象への過剰な愛がうざい、ディテールに執拗にこだわりすぎ、これはドキュメンタリーではない、と否定されてしまう(かもしれない)。それに対して、《冷気を物理的に撮ったからって、冷気の記録になるとは思わない。僕らが撮りたいのは、自分たちと関わった部分の冷気、誤解と偏見に満ち溢れている冷気ですよ。そのかわり冷気にも愛情がある。そういうものしか撮ってないんです、ワンカットも。《∴》記録映画は事実じゃないんですよ。明らかにそこには「劇」が働いているんだね。彼女が自分をこう見せたいって「劇」が働くんですよ。これは美しいことですよ。それを覗けるんです。こんな幸せなことはない。》と。当然の前提がまったく共有されていない、虚実皮膜の被写体との関係性を像として定着させる戯れ||あくまでも恣意的な《引用／編集》のくり返し。《ドキュメンタリー映画と劇映画は違うと思うけれども、その違いをステレオタイプに語るのはバカげなことだよ。アメリカには白人と黒人の二つの世界があると言いきってしまふようなことだね。》。だが、嘆ずるべきことでもないのかもしれない、映像のプロと称するづくり手／教え手でも知らない／理解できない人たちは少なくともないのだから。ドキュメンタリー||客観||透明なメディアという不毛な呪縛から解放されるのはいいことであろうか。《僕は記録映画をつくり、記録映画作家と呼ばれています。しかし、ふだん、自分がつくっているものを「記録」とか「劇」とか分けて意識してはいません。自分がつくるものは「映画」なんだと

考えています。僕は映画そのものが好きなんです。《…》映画がもっとも充実しているときっていうのは、片方に劇映画というジャンルがあつて、もう一方に記録映画があつて、それがちょうど車の両輪のように動いているときだと思ふのです。そして、両方は当然シャフトでつながっているわけだから、片方だけが良くてグルグル回っていても、片方の車輪がなかったり、あんまりよく回転しなかったり、あるいはシャフトそのものが折れているようなときには——この場合、車というのは映画でシャフトというのは映画をつくったり見たりする人が置かれている社会的な文化的な状況、つまり映画の状況のことなんですけど——車は転倒するか、壊れてしまいますよね。》を普通に語り合える日が訪れることはないであろうか。

さまざまな技術の進歩のおかげで、これまでの集団制作(Ⅱアナログ)による、映画館における集団鑑賞(Ⅱ《シネマトグラフ》)だけでなく、個人制作(Ⅱデジタル)による、いつでもどこでも個人鑑賞(Ⅱ《キネトスコープ》)も、映画を見る、というメディア体験とみなされるようになった。映画は楽しい、映画は今でも娯楽の王様、映画は人を饒舌にする。それゆえなのか、《一つの映画の印象も、それを見る人が、どういう時期に見るか、その時どういう状態にあるかによって、随分違うものになるだろうと私は思う。同じように、一人の作家についても、その作家のどの作品から見始めるか、或いはどの作品の次にどの作品を見るかによって、異なった印象を持つようになるのは当然である。そうしたことについて、見る人間としての自省なしに、褒めたり貶したりすることは傲慢の誇りを免れないだろう。》を頭の隅にも置いておくことのできない人たちの感想が氾濫する。しかれども、《映画にはいろんな見方がある。有名な映画評論家が解説してくれていることは、勿論、プロの

人だから、なるほどと思うことはある。でもそれは映画館に行くまでの道案内でしかない。やっぱり映画は、それぞれの人が、その人だけの喜びとか切なさをもたらうことだろう。《…》いろんな映画の見方があると書いて、ボクはひとつの言葉、ひとつのシーンをポケットの中に入れて映画館を出ることができたらその映画は一等賞だと思う。《…》映画館を出た時、ボクのポケットには「ずっと好きだよ。ありがとね」って感じが入っていた。そんな科白せりふはなかつたけど…》といった《局外》からの言説にも頷いてしまふ、映画を見る、はあくまでも寝牛起馬なメディア体験なのだ、と。ただし、非日常も必要なはずである。《映画を見るとするのは、簡単な話であります。ところが、その簡単なことというのが、実は一番難しいわけです。なぜ難しいかという、いま簡単なこととして、皆さんがたは呼吸をしておられると思いますけれど、ある時期「自分は呼吸をしている」と思われると、大体どこかで息苦しさが出てくるわけです。いま、呼吸をしつつあると考えて呼吸をする人というのは、まずいまいわけで、無意識のうちに呼吸をしなければいけません。》。たとえそれが苦行であったとしても、《映画体験というのは、可視的な有限な画面というものを不可視のイメージというものに、次々に置き換えていくことではないのだろうか》を思索しなければならぬ、《イメージによる可視的なもの抑圧の時代》に抗いたいのならば。

今から30年前(民放開局から25年目)、あるテレビディレクターが呟いた。《思えば、テレビジョンも随分虚仮うつろにされてきたものだ。兎に角テレビジョンときたらお人好しだから、今でもかなり虚仮うつろにされている。」「いや、俺はテレビを馬鹿にした覚えはない。」と偉張れる人は、そんなに多くないだろう。外野席の野次なら

ば兎に角、一見親戚顔の映画や芝居からも、何か呉れなきや遊んでやらない」と、言われたものだ。血肉を
 わけたラジオからも愚弟よばわりされた位だ。ふと気がついてみると、造語能力に富むとされる日本語で、テ
 レビジョンに相当する言葉がないのに驚いてしまう。せめて『映画』とか『新劇』とか『歌舞伎』とかいった
 具合の単語が欲しい。略して「テレビ」と言ってるうちは、虚仮にされる歴史が続くような気がする。『放送』
 『電波』 『中継』 『番組』 と来ても、周囲をぐるぐると歩き回っているみたいだ。今じゃ廃れちゃったけれど、
 ひと頃は『電気紙芝居』と言われたものだ。『婦人子供専用車』と呼ばれたような記憶もある。シルバーシー
 トと言われなかったことで、辛うじて我慢すべきなのか。いずれにせよ、虚仮にされた形容しか残っていない。
 尤も、民放はじまってこの方、テレビジョンも相当に居直って来たけれど、それが精一杯の歩みだった。今
 でもテレビジョンはテレビ、インターネットの登場でヒエラルキーの最下位は免れることができたが、テレビ
 局の企業イメージが向上しただけで、浅薄なメディアとみなされたまま、誉められることはほとんどない。日
 本の番組は海外の番組に比較して……と語りたがる人たちは少なくない。その人たちは、日本の番組を、海外
 の番組を、どれだけ見てから批判しているのだろうか(アメリカの一部の娯楽番組以外の比較対象があるの
 であろうか)。昔は良かった、たとえば、『岸辺のアルバム』『早春スケッチブック』のようなドラマがつくら
 れていた、相対して今は……も語られがちである。たしかに世の中は変わった、娯楽の選択肢はめちゃくちゃ
 増えた、テレビで時間潰しをする必要もなくなった。いわゆる制作者も変わった、いわゆる視聴者も変わった、
 どちらも進化／劣化したのかもしれない(ただし、制作者も視聴者のはずである、制作者が視聴者としてテレ
 ビときちんと対峙していさえすれば)。あるいは、テレビは単なるビジネスの手段になってしまったのか、日

陰者たちの矜持などというのは、もう世迷い言なのであろうか。《録画／共有》が一般化したとはいえ、あくまでもテレビは、動的で雑多な今を、否応なく表象してしまう生物なまものなメディア。テレビはテレビ、猥雑ではあるが、決して新聞／映画の粗雑なコピーではない。各々の時代に各々の場所で喜怒哀楽する者たちだけが／だからつくることができる、テレビというメディアがつけられなければならない、番組Ⅱ作品がつけられている（はずである）。重ねて声高に付記するならば、そもそも真剣にテレビを見ている人などいないのかもしれない。テレビのコンテンツは：と視聴率しか考えていない商売人の方々は言うまでもなく、テレビの質は／文化は／社会性は：を論じ、表現に高尚／低俗のレッテルを貼ろうとする識者と称する方々も実は番組をまともに見ずに、ひとりよがりのリテラシーを語っているのが実情（小市民の日常の欺瞞を描き視聴者を挑発した、その2作物も、本放送時の視聴率は芳しくなかった。当時リアルタイムに見ていなかった人に限って、後の評価から、それらを絶賛し、今日を嘆く）。そして、視聴者が要求する真つ当な／理不尽な規制も増えるばかりである。視聴者はテレビになにをさせたいのか。昔日、《世の中、バカが多くて疲れませんか?》にクレームをつけたのは、やはり、その該当者たちだったのであろうか。

いわゆるマスコミ人たちよりも、いわゆる普通の人たちの方が、各種メディアを駆使し、より速く、より多様な情報を手し、容易に世界中に発信することが可能となったのが今日の情報化社会。それによってネガティブな事件も起きている。しかし同時に、ポジティブな動機を持った個人が、特定の利害等に左右されないゆえ、これまで社会をコントロールしてきた（とみなされてきた）プロたちよりも、世界をより良い方向に導きはじめ

ていることも無視できない、その流れをだれも止められない。だが、既得権を固守したい者たちは、しぶとく陰湿に抵抗する。ただし、所属や肩書き等に頼らずに自らの力で修羅場をかくくぐってきた知恵ある者ならば往生際は悪くないはず、《古い船をいま動かせるのは古い水夫じゃないだろう》を十分自覚しているはずだから教育現場においても、発信ばかりが強調される時代だからこそ、《記門の学は、以って人の師たるに足らず、必ずや其れ語を聴かんか》を胸に刻み、いわゆる本をはじめとする向來の授業の主役であったオールドメディアに固執することなく、かといって電子黒板のような安易なニューメディアに惑わされずに、それぞれのメディアの内容／形式を慎重に吟味して適宜活用しなければならぬ。そして、これまでのような、なにかしらの権威に権威だからという理由だけで盲従することを強いることはできない、小さなことであっても各個人が社会的な選択を積み重ねていく力の育成が求められているのだから。すべてを自明にして安住するのではなく、《マシンが作品を作るわけじゃない、作るのは自分です。マシンの性能ばかり気にしているのは「マシンに恋している」人たちは結局何もまともに生み出せないんだと思います。《∴》自分のやりたいことに一ミリでも近づくためにどうすればいいか。頭の中に生まれてきたものをいかに妥協せずに出していくかが大事なんです。そこに至るまでに道具やお金が必要となり、そういうことが最終的な仕上がりに影響を及ぼしますけど、ほとんどの人間の才能というのはあまりかけ離れていなくて、それを具現化できるのか、できないのかという違いなんですよ。》を十二分に自覚し、後生たちが模倣しないように、必要以上に他人を頼らずに、命令すること
をデフォルトにせずに、1人のブリコロールとして、《The best way to predict the future is to invent it》を己の行動で示すだけでよい(のかもしれない)。

この序の文章は《iPhone》で書いている。《WriteRoom》をエディタとして、《大辞林》《日本語大シソーラス》《ウィズダム英和・和英辞典》《プチ・ロワイヤル仏和・和仏辞典》で語句を調べ、《Safari》で《Google》《Wikipedia》にて検索、《産経新聞》《BBC》《Byline》でニュースやブログの情報を収集、《YouTube》で話題の動画をチェック、《iTunes》で《キラ☆キラ》《日曜天国》の《Podcast》を聞聴、《セカイカメラ》で《AR》な社会をフィールドワーク、資料集めと称して《Camera》で写真やムービーを撮影、《Photo fix》《TiltShift Generator》《ReelDirector》で加工／編集、気分転換に《i文庫》で《伊丹万作》《谷譲次》《夢野久作》の頁をめくり、《Bloom》《Trove》《Trippy》の世界に浸り、《Pianist》《Gangsa》《Matrix Music Pad》を奏び、あるいは《PRISM》《Space Invaders Infinity Gene》《FIFA10》に没頭し、電車の中で、歩きながら、時には会議中に……いつでもどこでも気が向いた時に《フリック》でつたない文章を入力し、《クラウド》にバックアップを保存する（入稿する際には、パソコン経由でプリントアウトをして校正もする）。凡人は道具（＝メディア）に依存することは避けられない。個人的に使い慣れていない《Microsoft Word》よりも遙かに心地よく、思考を現前化することをサポートしてくれる、しかも、音楽も聴ける、電話としてさえ使える、かといって《iPhone》に、この文章の責任を負ってもらえるわけではない。この小さな新しいメディアとの出会いで、ドメスティックな企業の理念なき機能の建て増しと無意味なスペック至上主義と過保護な施しから解放された。《マルチタツチ》の気持ちよさに代表されるように、その希図が明確に具体化されているのならば、世界の制御（＝コミュニケーション）がハード（の交換）ではなく、ソフト（のバージョンアップ）で一変する、も体感できた。《iPhone》は妥協のない最高のユーザ体験をもたらすために現実世界のハードウェアの制約を含むあらゆるディテール

と戦っています。これは、対抗馬となる Android などにみられる理論上・コンセプト上で美しいアーキテクチャを目指す世界観とは対極に位置する、ある意味では泥臭い「本当にきちんと動いてナンボ」のアプローチです。《∴》これらはソフトウェアのアルゴリズムがどうかさういう大上段な話ではなくて、ユーザが実機で使ったときに「ちょっとでもスクロールがもつさりしてはいけない」というような、学者肌で理論派の開発者が苦手とする、言葉での説明が難しく、たいてい安易に妥協されがちな「フィーリング」の部分です。私は、その非言語的な価値に徹底的にこだわるその姿勢に、アップルの真骨頂をみました。《に強く同意してしまう。一度でも触れてしまえば、《iPhone なしでよく生きてきたな》と書いている。》と過去を省察し、まだそれが存在していなかった過去から未来を想定したとしても、《A lot of times, people don't know what they want until you show it to them.》に帰結してしまう。つくる、を軽視するマーケティングという現代社会の徒花の虚しさを納得させられるだけである。そして、それが自分の生活に欠かせないメディアとなった時、《世の中に存在する対立概念には便宜上、人が境界線を引いている。しかしものごとの多くは連続的であり、人が線引きをしたとしても、その基準は時代や意見によって変化していく。デジタルとアナログという概念は、さまざまな境界が実は人が決めたものでしかないことを示し、なぜそこが境界なのか？ その境界を動かすことは可能か？ といった問題を意識させてくれる。》にたどりつける(かもしれない)。

かつては、といった経験という先人たちの数少ない優位性を堅持しようとする言辭が有効かつ客観性があるか否かとはかく、《記憶》は創造の源である、しかし、美化する必要はない。けれども、単なる懐古／妄想

でしかない、ということを前提に、かつては一般的であった(知的)背伸びは、もうなくなってしまったのであろうか、知らない、は、いつから罪／恥ではなくなったのであろうか、と囁いてみる。pedantが最初に用いられた時は、単にteacherを意味していたことは忘れてはならないのかもしれない。言うまでもなく、過去の遺産に阿ることはない、新しい状況に即座に反応しなくてもよい、そもそも知識がすべてではない、かといって安易に《Don't think, feel!》と思考停止はすべきではないはずである。《固有名詞》に力点を置く必要もないのかもしれない。でも、たとえば、《本歌取り》や《パロディ》は元の作品を知っているからこそ楽しめる。硬軟問わず、あらゆるジャンルにおいて、前提があるからこそ知識は積み重なっていく、一般論に帰してしまつては得ることは少なすぎる。ただし、シニフィエを味わうことなくシニフィアンを諳んじるだけなら、賢いオウムとなんら変わりが無い、漢文の《音読》と同じ効果を求めているのだ、と居直れないならば。ひと頃のように、メタファな数式を並べて幻惑する必要もない。ただし、自らの村のルールが絶対であると自己省察をまったくしないのならば、科学と宗教に本質的な違いはなくなってしまう。社会を、科学を、凝視／探究すべきではないのか、なにかが《立ち現われ》るまで。一方、語りえぬことに対して沈黙することが正しいのかもしれない。それこそが合理的で、それこそが学問なのかもしれない。しかしながら、能天気なホーリズム、引き出しの足りないセミオロジ、焦点の暈けたテーマイズム、余白のないプラグマティズム、皮相なオートマティズム、経験も覚悟もない空論、俯瞰も歴史認識もないOTJ……学を司る人たちが問われているのかもしれない。日常生活には無益な大学という《ノイズ》に巣くう、決して《カタギ》ではないはずの周縁者たちよ、もっと勉強しようよ、もっと遊ぼうよ、と素朴に告げるしかないのかもしれない。少なくとも、いかな

る分野であれ、制約は規制ではない、制約を楽しめてこそプロであろう。絵に描いた餅と承知の上で《Bhinneka Tunggal Ika》を目指すべきかもしれない。ただし、止揚しなくてもかまわない、希望だけでもかまわない。ファンタジーが共有できない、はったりをかませられない、学問という営みの凄みを体現できない大学に存在理由などないはずだから。想像せよ、大学という最高の学び場／遊び場を満喫できるように。(すでに崩壊しているかもしれない)知の共同(幻想)体の仁義に縛られない《チンピラ》として、自己矛盾や朝令暮改を恐れず、夜郎自大に他者の領域に踏み込む気構えさえあればよいのかもしれない。《そういうことでいいんですか、物事ってのは?》「いったいどこが悪いんだって? そっちから聞きたいね、俺は。《…》それは人間の育ちというか、貫禄というか、人間のそれだけの内容のものによって変わるんだ」「ほお、で、歴史だとか事実だとかは?」「知らない、そんなものは。知らないと言いつけるか言いつ切れないかが勝負だ、この野郎!」。軽やかに、野蠻に。別言、《もっとしなやかに もっとしたたかに》。俗世を《read》ではなく《scan》で見るまで、《音楽は浴びるように聴き、映画は包み込まれるように観る。その全体をその中に入り込んで経験する》。情報は多すぎて困ることはなく。《Less is bore》。シンプルとは、なにもない、ではなく、過剰なるものを究極までに研ぎ澄ました成果、なのだから。《P o o || トビヤマが飛べば飛ぶほど、こっちにはたくさんデータの手にいれるってわけ。ナツロウ|| 走れ、走れ、走れ。P o o || 飛べ、飛べ、飛べっ!》。たとえ膨大な資料の森の中で迷子になったとしても、結果的に《重層的な非決定》に陥ったとしても、《笑うのよ、あ・か・る・く》。

なにかしらの新しい議論／挑発／わくわくをはじめめるために。

注

次章以降の展開ゆえ、《 》の引用や固有名詞等の出典や解義は省略する。